



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3793 号 2017.7.26 発行

障害のある兄と生きる～高校生の心の軌跡



NHK ニュース 2017年7月25日

神奈川県相模原市の障害者施設で入所者19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件から1年となります。「障害者は不幸を作ることしかできない」。逮捕された元職員が供述したというこの言葉に強い憤りを覚えた人が大勢いる一方で、ネット上では同意する声も見られました。障害者にどう向き合うか、改めて考えた人も多いと思います。私もその1人です。そんなとき、お兄さんに障害があるという、ある女

子高校生に出会いました。お兄さんのことが嫌になって、会うのを避けていた時期もあるという彼女。自分の気持ちに罪悪感を持ち、思い悩む日々が続きましたが、やがて、ありのままを受け入れることの大切さに気づいたといいます。「障害のある、ふつうのお兄ちゃんと一緒に生きる」。そんな思いにたどりついた、女子高校生の心の軌跡を追いました。(山口放送局 渡邊日菜記者)

佐竹真依さん(18)。山口県の高校の通信制課程で学んでいます。真依さんは3つ子のきょうだいの末っ子。姉と兄がいます。

真ん中のお兄さん、良太さんは脳性まひで体に障害があります。ふつうに会話ができませんが、両足や右の上半身は思うように動かすことができません。移動には車いすが欠かせず、かろうじて動く左手だけでこいでいます。1歳のときから家族と離れ、介護士や看護師がいる福祉施設で暮らしています。

兄ちゃんは障害者

佐竹真依さん(18)。山口県の高校の通信制課程で学んでいます。真依さんは3つ子のきょうだいの末っ子。姉と兄がいます。

真ん中のお兄さん、良太さんは脳性まひで体に障害があります。ふつうに会話ができませんが、両足や右の上半身は思うように動かすことができません。移動には車いすが欠かせず、かろうじて動く左手だけでこいでいます。1歳のときから家族と離れ、介護士や看護師がいる福祉施設で暮らしています。



真依さんは月に1回ほど、良太さんのもとを訪ねています。面会の様子取材させてもらうことになり、その前日、真依さんからは「もしかしたら兄ちゃんが緊張するかもしれ

ません」と声をかけられました。そして当日、初めて会った良太さんが私に言った言葉は「真依は人と話すとき緊張するので、よろしくお願いします」。

真依さんたちは三卵性の3つ子ですが、そっくりな言葉に思わず「さすが3つ子！」と言いたくなりました。2人の話題はたわいもない日頃の出来事。互いに悩みを打ち明けたり、将来の夢を語ったりすることもあるそうです。言葉を交わす2人の横顔を見ていると、仲のいいふつうの18歳だなあと感じました。



衝撃の事件

そんな真依さんに衝撃を与える事件が起きました。去年7月、神奈川県相模原市で起きた障害者殺傷事件です。

「障害者は不幸を作ることしかできない」

逮捕された施設の元職員の供述に、真依さんは強いショックを受けました。

「絶対に許せない。障害者という部

類でいえば兄ちゃんもそうで、障害があるだけで殺していい存在になっているのがすごく怖かった」…そう振り返ります。しかし、真依さんにも、障害のある兄を疎ましく思い、どう向き合えばいいか、分からない時期があったのです。

“兄ちゃんとはほかの人と違う”

小学校に入るころまで、真依さんにとって良太さんは心優しい、大好きなお兄さんでした。車いすを使うのも当たり前のこと。「障害者」を意識したことは一度もなかったといいます。

当時、お兄さんが暮らしていた施設は自宅から車で片道2時間以上かかりました。それでも、大好きなお兄さんに会うためなら気になりません。月に1度は両親に連れていってもらい、2人でお菓子を食べたり買い物に出かけたりと、一緒に過ごす時間を楽しんでいました。

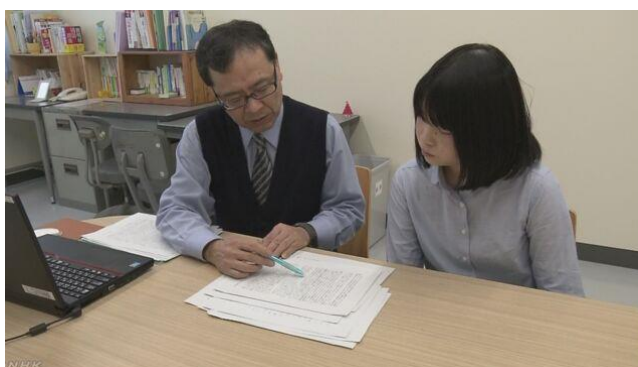
そんな真依さんの気持ちが変わったきっかけは同級生の言葉でした。障害があることを知り、「兄ちゃん、どんななん？写真見せてや」と言われたのです。

「見せ物のように思われている」…真依さんはとても傷つきました。ほかの友達とは3つ子と知って興味津々な様子で話を聞いてきたのに、お兄さんが脳性まひだと話すと、なぜか急に会話をやめてしまいました。買い物に出かけたスーパーで車いすを押していると、舌打ちをされたり指をさされたり。首がすわらない様子に「見て。まがつとる」とあからさまに笑われたこともありました。

そんな経験を繰り返すうち、真依さんは「障害者」ということを強く意識するようになりました。「兄ちゃんとはほかの人とは違う」「恥ずかしい」と思うようになったと、打ち明



けてくれました。外出したとき、おさんから離れて歩くようになり、やがて中学生になるころには何かと理由をつけて面会にも行かなくなっていました。



自分の気持ちが許せない

一方で、真依さんはそんな自分の気持ちが許せずにいました。

「一緒にいると恥ずかしい、つらい、イライラする…。こうした感情は障害者の兄に対する悪意ではないか。殺すまではいなくても、自分も、障害者の兄を疎ましく思っているじゃないか」

自分が抱く感情に罪悪感を持ち、思い悩む日々が続きました。

作文との出会い

そんな中、真依さんの気持ちを変えたのは「作文」でした。声をかけてもあまり話さず、悩んでいる様子に気づいた高校の久原弘先生がお兄さんに対する気持ちを、包み隠さず文章にしてみようかと勧めたのです。

昔と比べて会うことが少なくなったお兄さん。頭に浮かぶのは、幼いころの楽しかった思い出です。

「私が面会に行くたび大興奮で迎えてくれる。『俺は真依がいちばん好きやけえ』なんてうれしい言葉をくれたりもする」

一緒にいて、つらいこと、嫌なこともたくさんあって、恥ずかしい思いもしたはずですが、こんな言葉もつづりました。

「足は動かず右手も使えず、それでも左手一つで前に進み続ける兄を自慢に思う」

作文で気づいたことは何だったのか、真依さんに尋ねてみました。

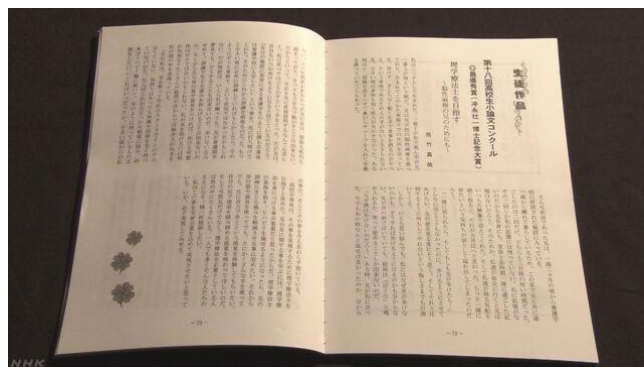
「気持ちを整理してみると、障害者として意識するあまり、1人の人間として向き合うことを忘れていたのかもしれない。そして、本当は兄のことをこんなに好きだったんだと、気付かせてもらいました」

いいところ そして嫌なところも認める

興味本位で見られたり、心ない言葉をかけられたりすることは今もあるそうです。真依さんは「なるべく目立たないでほしい」と思っているのに、人の集まるところが大好きなお兄さんはスーパーやショッピングモールに行きたがり、周りの人に「こんにちは」と声をかけてあいさつします。真依さんは「お願いだから静かにして!」とイライラしてしまいますが、でも最近是这样子になりました。

「ふつうのきょうだいでも『嫌い』という感情が湧くことはある。今までは『嫌い』とか『恥ずかしい』という気持ちがあったら兄ちゃんに悪いと思っていたけれども、今は気にせず接していきたい」

障害者の兄ではなくふつうの兄として、いいところも嫌なところも認め、



そして自分の気持ちに正直になる。ありのままを受け入れる心ができるとき、会うのがまた楽しみになったといいます。

ちなみに真依さんはお兄さんの夢や思い出など、テーマをかえていくつもの作文を書き、全国コンクールで最優秀賞に選ばれたこともありました。将来、理学療法士になって、リハビリを通じて、お兄さんのような人にとってできることを増やしていきたい、という夢もつづっています。

でも、当のお兄さんには作文を書いたことすら恥ずかしくて言えずにいました。そんな中、施設の職員が良太さんに作文のことを伝えました。

良太さんはそのときの感想について「自分のことを気遣ってくれているんだなって分かって、すごいうれしかったです。半泣きになっちゃいました」とうれしそうに話してくれました。



2人の楽しみ

再び会うようになった2人には今、ささやかな楽しみがあります。面会のとき、2人は施設から車で20分ほどのショッピングセンターに向かいました。

「こぼさんでね！」

フードコートで真依さんが差し出したのは良太さんの大好物の微糖の缶コーヒー。動かすことができる左手

で受け取った良太さんはすぐに香りを確かめました。

「これ！」

お気に入りの香りに目を輝かせました。しばらく遠ざかっていた2人に、楽しい時間が戻ってきました。

良太さんに真依さんのことをどう思うか尋ねてみると「優しいときもあるし、ひどいときもあるかな」と笑っていました。良太さんも真依さんのいいところ、嫌なところ、そのまま受け入れているようでした。

“ふつうのお兄ちゃん”

「本人には恥ずかしくて言えないけれど、兄ちゃんはずごく大好きで、大切に、大きな存在」

そう語っていた真依さんに取材を終える日、改めて気持ちを聞きました。

「考えていることもふつうだし、優しいけれども、ちょっとちやほやされたら調子に乗るし、そういうところもふつうの18歳と変わらない。足が悪い、手が悪いとか、そういうところはあるけれど、全然ふつうのお兄ちゃん。ほんと『兄ちゃん』って感じ。障害のあるなしに関係なく…」



そう答えて「うふふ」と笑った真依さんの笑顔にはもう悩みの影は見えませんでした。

取材を終えて

「障害者とどう向き合えばいいのか」。取材する私は自問し続けてきました。「障害者は健常者と同じ。差別してはいけない」…至極まっとうな意見ですが、実はこういう言葉を耳にするたび、息苦しさを感じていました。

頭では理解しているのに、町なかで障害者と出会ったとき、無意識に視線を外す自分がいました。じっと見るのが申し訳ないという気持ちとともに「私は差別する気持ちも持っているのではないか」と悩んできました。それだけに真依さんもお兄さんを避けていた時

期があったと聞いて、正直、救われた気がしました。

取材を通じて思うのは私たちは「自分と違う」と感じたとき、驚いたり、拒んでしまったりするものだという事です。

筆者

そんなときは肩の力を抜いて、いい面もそうでない面も、ありのままを受け入れてみる。大切なのは違うものを「同じだ」と無理にとらえるのではなく、それぞれのやり方で違いを受け止めることではないかと感じました。障害者と向き合うのに、実は特別なことは必要ないのかもしれない。



相模原事件1年 「誰もが祝福されて生まれてきた」「話せなくても言葉はある」重度障害の娘を持つ母で施設代表の西島愛子さん

産経新聞 2017年7月25日

度の知的・身体障害の娘を持つ西島愛子さん。「人に上下はない」と訴えた＝大阪府吹田市千里山東

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で元施設職員、植松聖被告（27）＝殺人罪などで起訴＝に入所者19人が刺殺されるなどした事件から26日で1年となるが、「障害者は生きていく意味がない」と言い放った植松被告の言葉に心を痛める人は多い。重度障害の長女

（45）を持ち、大阪府吹田市千里山東の障害者通所施設代表の西島愛子さん（73）もその一人。「誰もが祝福されて生まれてきた存在なんです」と力を込める。（加納裕子）

西島さんの長女は重度の知的・身体障害があり、話すことはできないが、ジェスチャーでアピールする。地元の小中学校と養護学校に通った後、西島さんは社会とつながる場所を作ろうと、平成2年に通所施設「吹田自立の場 はあてー」を開設した。「重い障害がある人が在宅にならないための施設は、当時ほとんどなかった」と振り返る。

現在の通所者は長女を含め重い知的障害がある10人。7人のスタッフで午前9時45分から午後3時まで、一人一人の状況に応じて、家庭的な雰囲気です。昼食もそれぞれにあわせるが、オープン当初から、スタッフも同じメニューだ。「同じ生活をし、同じ時間を共有することを大切にしています」と西島さんは話す。

事件は大きく報道されたが、利用者たちが深く理解した様子はなかったという。ただ、被告の「意思疎通できない人たちを刺した」との供述に、西島さんは「重い障害があっても話せなくても、言葉はあるんです」と強調する。施設のスタッフには常に「見られてますよ」と伝えている。

事件から1年。「被害者をわが子に置き換えたとき、家族の思いは計り知れない。人に上下はないし、人は支え合って生きるもの。被告は、それをどうして見失ってしまったのか」と無念さを語る西島さん。スタッフとも話し合い、「利用者さんを大切にしよう」と改めて確認したという。そして、こう訴えた。

「誰もが祝福されて生まれてきた存在だということを忘れてはならない。目の前にいる人を大事にしていきたい」



「障害者はいたほうがいい」 一緒に生きるパン屋の日常 船崎桜



朝日新聞 2017年7月25日
パン教室で親子と一緒にパンをこねるユースケさん
(左) =横浜市緑区 (画像の一部を加工しています)

横浜市緑区にある団地の一角に、「ぶかぶか」というパン屋がある。牛乳と卵を使わず、天然酵母と国産小麦で作る素朴なおいしさを売りに



している。ほかの店とちょっと違うのは、およそ40人の知的障害者が働いていることだ。

■自由な接客 ファンも

レジに立つのは「おしゃべりと計算担当」の辻克博さん(32)。「ベネチア、イタリア、マッターホルン、スイス……」と、つぶやきが途切れしない。パンをトレーに載せていくと、暗算で金額を教えてくれる。「丁寧な接客」はないが、つぶやきをBGMとして楽しみに来る人もいる。

新しい人を見ると、さっと近づきマシンガントークを始めるテラちゃんこと寺沢郁美さん(24)。「フェイスブックやってますか? 今日もぶかぶかがんばります」。人なつこい彼女に誘われ、フェイスブックで友達になる人も多い。

やまゆり園園長「あなたの笑顔思い出す」 追悼の辞全文 朝日新聞 2017年7月24日 追悼の辞を述べながら涙ぐむ津久井やまゆり園の入倉かおる園長=相模原市南区、代表撮影



24日にあった津久井やまゆり園の追悼式で、入倉かおる園長は「園の地に降り立って身を置くと、あなたの息吹を感じる。風に吹かれると、あなたのしぐさがよみがえる。朝の日差しがまぶしい時、あなたの笑顔思い出す」と涙ながらに追悼の辞を述べた。全文は以下の通り。

毎年めでていた津久井やまゆり園の桜は今年も見事に咲きました。でも私は、今年の桜をゆっくり見上げることはできませんでした。引越して忙しかったからではありません。あなたと一緒に毎年見上げていた、一緒に花見をしていたことを思い出してつらくて見上げることができなかったのです。

あの日がなければ、今年の桜も一緒に見上げることができたに違いありません。桜だけではなく、プールで夏を満喫することも、食欲の秋を謳歌(おうか)することも、音楽に合わせて歌を口ずさむことも、あの日がなければ、そんな穏やかな日が繰り返されてきたに違いないのです。

津久井やまゆり園の地に降り立って身を置くと、あなたの息吹を感じます。風に吹かれると、あなたのしぐさがよみがえります。朝の日差しがまぶしい時、あなたの笑顔思い出します。色とりどりのあじさいを眺めると、あなたの服と重なります。

突然命を奪われた無念さ、残されたご家族のみなさまの悲しみ、苦しみには、到底およぶものではありません。それでもあの日まで、それまで一緒に過ごしていた仲間の1人として、言葉にならない悲しみ、哀悼の思いを胸に、この1年過ごしてきました。

あの日守ってあげることができなかったことの申し訳ない思いで、時間が止まったよう

な1年でした。本当に申し訳ありませんでした。気が付けば夏を迎えていたのです。

この1年の間、高い空から見下ろして、私たちを見ていてくれたのでしょうか。悲しみに暮れるご家族を、見守っていてくれたのでしょうか。これから私たちはどうしていけばいいのでしょうか。何を目指してやっていけばいいのでしょうか。

高い空からどうかしかって下さい。立ち止まるなど。高い空からどうか教えて下さい。一緒にご飯をたべた仲間がいます。同じ車でドライブをした仲間が待っていると。きっと1年が過ぎても、この悲しみは続くでしょう。それでも私たちは今、目の前にいるお一人おひとりに寄り添って、あの日の前まで繰り返されていた暮らしを取り戻すために、誠心誠意尽くしていきます。

どうか高い空から見ていて下さい。津久井やまゆり園があのに戻って、息吹を吹き返すまで、今それぞれの暮らしの中で、懸命に生活をしている仲間たちを、職員を。

そのことを伝えるために、今日はここにやってきました。

高い空に行ってしまった方々の、ご冥福をお祈りするとともに、ご家族のみなさまのお気持ちが、1日でも早く癒えることを願っております。

これで津久井やまゆり園園長、追悼の言葉とさせていただきます。

政府が自殺防ぐ総合対策大綱を閣議決定 10年で自殺率3割減をめざす

産経新聞 2017年7月25日

政府は25日、国の自殺対策の指針となる新たな自殺総合対策大綱を閣議決定した。自殺者は減少傾向にあるものの「非常事態はまだ続いている」と指摘し、自殺死亡率（人口10万人当たりの自殺者数）を今後10年で30%以上減らすとの数値目標を掲げた。

大綱の見直しは5年ぶり。2007年の初の大綱では「10年で20%減」という目標を掲げ、達成しているが、新大綱ではさらにハードルを上げた。自殺対策を、生きることの阻害要因を取り除いていくことと定義し、長時間労働の解消や産後うつへのケア、性的マイノリティーに対する周囲の理解促進など、多様な対策を打ち出した。

年間の自殺者は、16年は2万1897人と7年連続で減少。03年の3万4427人と比べると減っているが、自殺死亡率は他の先進国と比べて依然として高い。新大綱は、自殺死亡率を15年の18.5人から25年には13.0人とするとしており、自殺者数にすると1万6千人以下となる計算だ。

時間外勤務、「月45時間程度」に設定 小中学校教員の業務改善案 長野

産経新聞 2017年7月25日

県教育委員会は24日、小中学校教員の長時間勤務を改善するため、時間外勤務を1人当たり平均「月45時間程度」に設定する業務改善案を公表した。現在の勤務実態よりも平均18時間以上の縮減を図る内容で、市町村教委から意見聴取したうえで今秋にも、数値目標を盛り込んだ具体案を正式決定する方針だ。

改善案は、同日開かれた有識者や校長らでつくる協議会の初会合で示された。時間外勤務を「月45時間」とする目標値のほか、新学期や年末の多忙期でも「上限80時間程度」とした。緊急時などを除き、「午後8時以降の勤務はなくす」とも明記した。

会合では、目標設定に異論は出ず、県教委は今後、超過勤務の原因となっている部活動の教員による指導のあり方も含め、改善に向けた具体策を検討する。

県教委義務教育課によると、小学校では発達障害がある児童への支援や、給食費など学校徴収金の会計業務などが大きな負担になっている。中学校は、休日を含めた部活動の指導などだという。部活動の指導をめぐるのは、文部科学省が今年度、これまで認められていなかった外部の人材が顧問となり、単独で指導・引率できる「部活動指導員」を制度化した。ただ、制度設計は各都道府県に任されているため、県教委は任用方法や処遇について

て、協議会などで議論する。

県教委は平成26年度、他の都道府県教委に先駆けて超過勤務縮減の改善策を策定。3年間にわたり、時間外勤務時間を25年度比で30%縮減する目標を掲げたが、達成できなかった。

県教委による教員の勤務実態調査では、今年度4～5月の時間外勤務の月平均は小学校で58・14時間、中学校だと72・26時間となっており、小中学校の平均は63・45時間。26年度の4～5月の調査と比較すると、小学校が4・16時間、中学校は2・98時間で、小中学校平均は3・87時間の減少にとどまっている

南信に地域協議会発足へ 全県網羅、若者の進学・就労支援 長野

産経新聞 2017年7月25日

「子ども・若者育成支援法」に基づき、南信地区で活動する若者支援の地域協議会（サポートネット）が28日、伊那市で発足する。引きこもりやニート、非行、発達障害などの理由で、社会生活に溶け込めない若者を対象に、進学や就労を積極的に支援する。同協議会は、南信を除く3地区で発足しており、これにより全県を網羅する態勢が整った。県は今後、各協議会の連携を強化し、実効性のある対応を進めていく方針だ。

南信の協議会は、伊那市のNPO法人「子ども・若者サポートはみんぐ」が事務局を務め、自治体や福祉機関、民間支援団体など71機関が参加する予定。

県内では東信で平成24年度、NPO法人「侍学園スクオーラ・今人」（上田市）が事務局となった協議会が発足。中信、北信でも昨年度発足し、これまでに3地区で支援した若者は延べ243人に上り、就労など自立に至ったのは98人になる。

社会生活を営む上で困難を抱える若者に対し、心理面や保健・医療、生活環境など個人的な事情を解決するには、多様な団体が連携し、専門性を生かした支援を行うことが求められる。

南信で協議会が発足することで、県内の協議会に参加する機関は計164となり、県次世代サポート課は「4つの協議会が連携し、支援を求める若者の状況に応じ、多面的で適切な対応が可能になった」と話している。

記者コラム 窓 笑顔のある農場

中日新聞 2017年7月25日

田園風景が広がる中能登町金丸のとある畑。約二千平方メートルにはナスやルッコラ、大豆などの野菜が植えられている。

町内の社会福祉法人つばさの会は今年から、自然栽培農業に障害者が取り組む全国組織「自然栽培パーティ」に参加している。障害者支援施設の利用者が、運営するつばさ農場で農作業をしている。

農場には笑顔が絶えない。「こんにちは」「何しに来たの」。農作業をする利用者たちが次々と話し掛けてくれる。「ルッコラ食べてみる」と言われ、収穫したてを食べてみた。ゴマのような風味とかむと広がるほのかな甘さ。おいしい。思わず利用者と笑顔を交わした。

活動は全国でも注目を集めつつある。笑顔とともに、取り組みが各地に広がることを願う。（松村真一郎）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

